

八色の森から Origin

平成三十一年度
(令和元年度)

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者 むつみグループ

藤塚 治義

すべてはここから始まった。

平成三十年三月に私は南魚沼市にひとつの提案をしました。それは市報に八色の森公園やその周辺の自然情報を紹介するものでした。

南魚沼市広報誌への投稿企画

「八色の森から」（仮称）

企画趣旨

八色の森公園及びその周辺の自然の情報を南魚沼市民の皆様に紹介する。

紹介にあたっての注意事項

イベント情報ではなく、あくまで自然情報を紹介する。

自然情報の中でも、身の回り、道路の脇や田圃など、気軽に歩けるような場所で見られるものや、誰でも名前を知っているような生き物に限定する。深山の中のもの（蘭や高山植物）などは紹介しない。

提案とともに二つの記事を見本として送りました。「カタクリ」と「ユキツバキ」でした。

四月のある日、南魚沼市の市報担当の方から市報五月一日号から記事を掲載しますので、原稿「ユキツバキ」を確認してくださいと依頼がありました。こうして『八色の森から』は、平成三十年五月一日号から連載が始まりました。

その後、年号は平成から令和へと変わり、令和三年四月一日号でまる三年となります。お陰さまで連載として続けることができました。読んでくださっている皆様に感謝しております。

市報に掲載される原稿はレイアウトの都合などで一部が変更される場合があります。この冊子では市報に掲載される前の元の原稿を紹介したいと思います。

著者紹介

藤塚 治 義

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者むつみグループ
公園管理事務所 所長

一級ビオトープ計画管理士・
技術士（総合技術監理部門・環境部門・建設部門）
公園管理運営士

カタクリ

南魚沼市の花。種から育てると花が咲くまで約7年かかります。芽生えた時はネギのような細長い葉が1枚だけですが、毎年少しずつ大きな葉をつけ、約7年間で地下茎に栄養が溜まると葉を2枚つけて花を咲かせます。

南魚沼では山地のやや湿った斜面に広く生育していますが、藪になつたり、乾燥したりすると見られなくなりす。

種にエライオソームというアリの好物がついていて、アリによって種が運ばれ広がります。そのため、アリ散布植物と言われます。

雪国ではあまりしませんが、カタクリの増殖のため、アリが種を運んで歩きやすいように落ち葉を掃くという方法もあります。アリが種を運ぶ植物はカタクリ以外にも、スマレの仲間やケマンの仲間など、多数が知られています。

八色の森公園内には自生していませんので、近隣のカタクリの種をも

らって増やそうかなと検討中です。

(平成三十一年四月一日号)



タンポポ

タンポポの黄色い花は春らしさを演出します。南魚沼に自生しているのはエゾタンポポですが、八色の森公園内では外来種のセイヨウタンポポが普通です。総苞片(普通の花の萼にみえる部分)が反り返っているのが外来種です。

タンポポは花が終わると花柄(花が付いている茎)が伸びて一旦寝ます。そして綿毛ができる頃になると

また花柄が伸びて立ち上がり花よりも高い位置で綿毛が丸く開きます。綿毛の根もとには種がありますから、風をつかつて種を広げるためのうまい工夫だと思えます。

路傍や公園などで普通に見ることができるとセイヨウタンポポに対し、エゾタンポポは里山のようなあまり改変されていない場所で見ることができません。これはセイヨウタンポポが在来種を駆逐しているわけではなく、生育する環境の違いですみわけていると言われています。

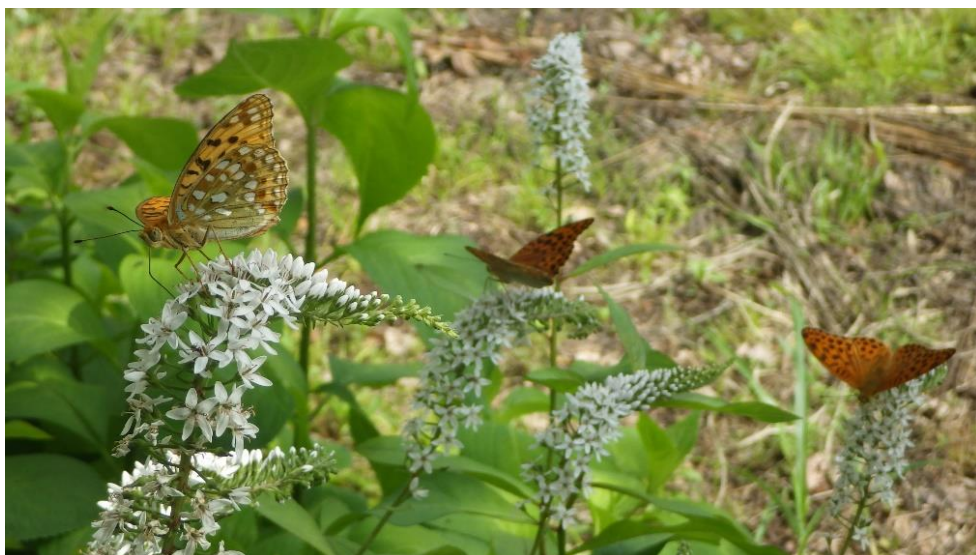
タンポポは身近な植物ですが、いろいろと謎と話題の多い植物です。

(令和元年五月一日号)



オカトラノオ

オカトラノオ（丘虎の尾）は花穂が虎の尾に似ているところから名前が付いたと言われています。サクラ



ソウの仲間で、魚沼地域では比較的に普通に見られる山野草です。初夏に白い花を穂状につけ、その穂が垂れ下がるのが特徴です。群生して、白い花がたくさん咲いているところは数々ともきれいです。八色の森では数箇所で見られますが、公園の南側（池田記念美術館のある側）の縁あたりにもとまってあります。満開の時にはいろいろな蝶や甲虫が集まってくることも賑やかになります。

写真の蝶はウラギンヒヨウモンです。この蝶は幼虫がスミレを食べるが育ちます。蝶を通して公園の草花がつかないことがわかります。オカトラノオの仲間で、よく似ている又マトラノオ（沼虎の尾）も自遊池の周りで見られます。こちらは湿地に生え、やや小型の草です。又マトラノオは花穂がまっすぐ立つのが特徴です。

（令和元年六月一日号）

タンポポは花が咲いた後、横にならなると実が成熟するとより高く立ち上がるという事は春の観察会でよく紹介することですが、多くの小学生は既に知っています。国語の授業で習うそうです。国語の教材の力はすごいなあと思います。そういえば、私も「口ウソクの科学」は国語で習ったのがきっかけで読みました。

園内の野生の植物で園芸品と間違われそうな花の代表がオカトラノオです。実際に園芸品としても売られています。八色の森のオカトラノオは自生だと思ふのですが、造成された公園なのでもしかしたら元は植栽されたものなかもしれません。雑草といわれる植物でもよく見れば花はきれいです。それに気がつく植物観察も楽しくなります。

記事の中でも触れています。花に集まる蝶の食草（幼虫が食べる草）は大抵の場合、その花とは別の植物です。蝶と植物の色々と関係をもっている公園の自然は成り立っています。木の周りの落ち葉で越冬する蝶などもいますから、一応落ち葉掃除も気をつけて見たいです。作業する人は気にしている程度ですけれど。

チョウトンボ



チョウトンボはその名の通り、蝶のような幅の広い翅をもっているトンボです。蝶のようにひらひらと飛びます。黒い翅は光の方向によって金属光沢をもった青紫色に輝きます。一時期少なくなつて心配されていますが、最近では少し増えてきています。

ようです。

チョウトンボは植物がたくさん生えている池や沼に生息します。八色の森には四つの池があり、それぞれいろいろなトンボが見られますが、水面が広く、植物がたくさん生えている自遊池で最も多くの種類をみることができます。チョウトンボ以外にも、ショウジョウトンボ、コシアキトンボ、キイトトンボやクロイトトンボなどのイトトンボ類、ギンヤンマ、アキアカネやノシメトンボなどの赤とんぼ類などが見られます。トンボは肉食なのでトンボが多いということは餌となる他の虫も多いということを示しています。

公園内を散策するついでにちょっと眺めてみませんか。

(令和元年七月一日号)

昔、信濃川の妙見堰(長岡市)の下流にある五辺の水辺を調査したときに多数のチョウトンボをみつけた。当時、チョウトンボは貴重なトンボという認識で、それが多数生息している環境は重要だという昆虫の専門家のコメントをもらいました。その後、少しずつチョウトンボの生息確認がふえていき、今ではかつての危機的な状況を脱したという認識だと思っています。八色の森公園に赴任してきて、自遊池でチョウトンボを見て、なんと懐かしい気持ちになりました。ただ、チョウトンボ、コシアキトンボ、ショウジョウトンボは、いずれもため池で多くみられるトンボですが、一般的に、そこはあまり水質がよくない(富栄養化が進んだ)箇所でもあります。親水性という点でちよつと微妙な感じですね。自遊池では多数みられるそのトンボが光の池で見られないのはそのためです。自遊池の水質が今以上に悪化しないように気をつけて見ていきたいと思っています。

※ 自遊池が富栄養化しているのは池の中の植物が繁茂しているためです。生活排水等が流れ込んでいるためではありません。植生の管理によって富栄養化の進行を留めることになっています。

夜の森の楽しみ

八色の森公園にはコナラやクヌギなどの広葉樹が沢山植えられています。それらの樹木をよく見ると、所々に樹液がにじみ出ている箇所があります。そんなところには昆虫などが集まります。

樹液に集まる昆虫たちは昼と夜で代わります。日中見られる代表的なものはヒヨウモンチョウの仲間やカナブンなどです。そして、夜になるとノコギリクワガタやコクワガタ、そして蛾の仲間が集まります。また、樹液にはスズメバチも来ますので刺されないように気をつけて下さい。

また、樹液に集まるわけではないのですが樹木を見ていると、カミキリムシの仲間（ミヤマカミキリ、ウスバカミキリなど）が出会いを求めているたり、羽化前のセミの幼虫が歩いているたり、アマガエルが虫を狙っていたり、いろんなことに出会えます。

八色の森は独立している人工林ですが、それでも多くの生き物で昼

も夜も賑やかです。

（注意。県立都市公園内は採集禁止です。観察をお楽しみください。）

（令和元年八月一日号）



夜の森探検は私が赴任してきてから始めたイベントです。八色の森公園ではじめて、今は八色の森と響きの森で開催しています。

非日常的な観察会でもたちらは興奮して楽しんでくれています。しかし、残念ながら周辺の山地から離れている八色の森ではそれほど多くの昆虫が見られるわけはありません。そのためカミキリやクワガタを見つけたことがほとんどもうれしそうです。

県立公園なので昆虫の採集はできませんが生態を観察することで昆虫や生物に興味を持ってもらえればなあと 생각합니다。

ナガエミクリ

八色の森公園の水路にいつの間にか発生した貴重な植物のひとつです。八色の森の管理棟の脇にあるつつじ池の中と、光の池につながる水路にこの植物は生えています。実の形が栗に似ていることから「ミクリ（実栗）」と呼ばれる植物の仲間です。ナガエミクリは環境省と新潟県でそれぞれ準絶滅危惧種に指定されています。

ミクリの仲間は魚野川筋にミクリ、ナガエミクリ、ヤマトミクリ、ヒメミクリ、タマミクリなどが記録されていますが、いずれの種もレッドリストに記載されている貴重種です。地味で花がないと区別できないやっかいな植物です。

かつては用水路の雑草でした。春先に行われる用水路の掃除は地域によつては水路をふさぐミクリの仲間を切つて水の流れを確保する目的で行われていたと言います。圃場の形と農作業の変化によつて減少した植物の一つです。

※準絶滅危惧…現状のまま減少が進むと将来絶滅危惧種になるおそれのある種。

（令和元年九月一日号）



この付近のミクリの仲間はいくつあるのですが、なかなか識別が難しく悩みのタネです。八色の森の水路はそれにしては人工水路です。しかも井戸から汲み上げた地下水です。そのなかにこのような貴重な植物が生えてきます。植物の分布がどうやって広がるのかは本当に不思議です。湿地の周りには貴重種やガミズゲやサワギキョウも見られるのですが、本当にどうやって広がってきたのか不思議なことです。

赤とんぼ

八色の森公園の池や水路では、春から秋まで、たくさんのおとんぼを見ることが出来ます。特に、秋になると赤とんぼの仲間が多くなります。「赤とんぼ」と言われる仲間はたくさんいます。八色の森公園で多く見られるのはアキアカネ、ノシメトンボの2種ですが、それ以外には、ネキトンボ、キトンボ、マユタテアカネ、マイコアカネ、ミヤマアカネなどが見られます。

赤とんぼの特徴は成熟するとオスが赤くなることですが、赤くなり方は種によっていろいろで、腹部が赤くなるものや全体が真っ赤になるものや、それほど赤くならないものもあります。一方で、ショウジョウトンボのように赤くても赤とんぼではないものもあります。

トンボは肉食で農業害虫を食べることから益虫として扱われます。トンボの数がたくさんいることは餌となる他の昆虫もたくさんいることを示し、トンボの種類が多いことは

小さな環境の多様性が高いことを示しています。
(令和元年10月1日号)



が、八色の森では毎年多数のトンボが見られます。うれしいのは見られる種類が比較的多いことです。新潟県のトンボは102種類記録されています。このことですが、八色の森で思いつく種だけでも20種近くになります。人工の池で約2割のトンボが見られるので、なかなか素晴らしいことではないでしょうか。

カマキリは大雪を予知しない

八色の森公園ではカマキリが4種類見られます。オオカマキリ、コカマキリ、チョウセンカマキリ、ハラビロカマキリの4種です。秋になると木々の葉が落ちるので、カマキリの卵鞘（らんしよう）が見つげやすくなります。種類によって卵鞘の形とついている場所が違いますのでぜひ散策しながら探してみてください。

ハラビロカマキリは近年分布を広げてきた南方系のカマキリです。ついに南魚沼でも普通に見られるようになりました。

まもなく八色の森は約2mの雪に埋まりますが、その下の草や低木にはカマキリの卵鞘がたくさんあります。カマキリが積雪深を予知して雪に埋まらないように卵を産むというデマがありますが、雪に埋まって卵が死ぬなら、南魚沼のカマキリはほとんど絶滅しているはずですが、そんなことはありません。

カマキリは捕食者として、また、ハリガネムシの宿主として生態系に重要な役割を果たしています。

※カマキリの卵鞘は卵囊といわれる場合もあります。どちらでもいいのですが、今回は卵鞘を使いました。

（令和元年十一月一日号）



カマキリに限らず、動物には未来を予知することなどできません。なんでもそんなエセ科学を多くの人が信じてしまうのか、それが日本の理科教育の問題だと思っています。自然観察は大切な現場で見なければ、そんな結論にはならないはずですが、自然観察は大切だと思っています。

ハクセキレイ

セキレイの仲間は尾羽根を上下に揺らしながら歩くのが特徴です。八色の森では、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイの三種が見られます。中でもハクセキレイは光の池や自遊池の周囲で普通に見られます。顔が白く、過眼線（目を通る線状の模様のこと）が黒いのが特徴です。

ハクセキレイは、以前は北海道や本州の北にいた鳥で次第に南へ分布を広げ、今では九州にも生息しています。もともと新潟県にいたのは、顔が黒くて眉（額の部分）が白いセグロセキレイですが、今は次第に数が減ってきているようです。キセキレイは主に山地に棲み、たまに公園にやってきました。

ハクセキレイは池や川だけでなく、人工的な水たまりにもよく来ます。冬季間は駐車場の融雪パイプによる僅かなたまりにまで訪れることがあります。

（令和元年一二月一日号）



ハクセキレイ



セグロセキレイ

「acedoon」に写真を上げるときに、しばしば間違えて、ハクセキレイと書きながらセグロセキレイを上げたります。その逆にしたりすることがあります。サムネイルをみて写真を選ぶのは危険です。こういうところに衰えを感じます。浦佐駅の駐車場の歩道橋にキセキレイが営巣したことがあります。

冬の小鳥たち（ウソ他）

この季節、八色の森は雪に覆われ、園内で観察できる生き物はとても少なくなります。そんな中で公園をにぎやかにしてくれるのは鳥たちです。冬に見られる小鳥はそれほど多くはありませんが、ウソ（亜種アカウソ）、カワラヒワ、シジュウカラ、エナガ、アオゲラ、スズメなどが見られます。多くは留鳥ですが、アカウソは冬に



ウソ(アカウソ)

やってくる渡り鳥（冬鳥）です。小鳥たちの多くは葉を落とした木の幹をつついてそこにいる虫などを餌としているようですが、アカウソはソメイヨシノ（桜）の芽を一生懸命かじっています。ウソの群れが桜並木にやってくるのと春に花見ができなくなるのではと心配になります。エナガはしばしばシジュウカラの群れに混じって現れます。おそらくシジュウカラの群れには数種の鳥



シジュウカラ

が混じっているのではないかと思います。天気の良い日に八色の森まで小鳥たちに会いに来てみてはいかがでしょうか。

（令和二年一月一日号）



エナガ

冬の小鳥たち2（アオゲラ）

先月に続き、八色の森付近で見られる鳥たちの紹介です。渡りをしない鳥（留鳥）はいつでも観ることが出来るのですが、冬は木々に葉が無いため観察しやすくなっています。

たまに公園にドロロロ…と響き渡る音の主、それがキツツキの仲間です。八色の森では3種類のキツツキをみる事ができます。一番大きいのがアオゲラです。アオゲラは背中が灰緑色で後頭に赤い部分があります。アオゲラに比べてやや小型で、全体的に白黒で頭と下腹部が赤いのがアカゲラです。そして、一番小さいのがコゲラです。コゲラは冬になると他の小鳥たち（主にカラ類）の群れに混じってやってきます。白黒の地味な小鳥です。

キツツキが木を啄くことをドラミングと言います。前述のドロロロ…はその音です。ドラミングの音が聞こえたら、ぜひその主を探してみてください。

（令和二年二月一日号）



アオゲラ

2年ほど前にアオゲラが事務所
の窓に衝突したことがありま
す。大きな音がして何事かと思っ
て確認にいったら窓の下にアオゲラが
落ちて倒れていました。拾い上
げてしばらく様子を見ていたら目を
覚まして、しばらくボーッとしてい
た後、飛び去っていきました。
それから事務所の窓ガラスには飾
り付けをするようになりまし

雪上の卵塊（ヤマアカガエル）

八色の森や周辺の山沿いの田んぼでは雪が解け終わらないうちからカエルの卵塊が見られるようになります。気の早いカエルは雪の上に産卵してしまいます。これらはヤマアカガエルの卵塊です。

八色の森にもいろんなカエルがいるのですが、雪が解ける前から動き出すのはヤマアカガエルだけです。山沿いの公園でよく見られるモリアオガエルやサンショウウオの仲間は成体が山地に生息していて産卵の時だけ池に来るのですが、八色の森はそれらの両生類が来るには、少々山地から遠いようで、残念ながら、見ることはできません。ヤマアカガエルも基本的には山地に棲むカエルですが南魚沼では田んぼでも見られます。

もうしばらくすると八色の森の池の周辺にトノサマガエル、ツチガエル、アマガエルなどが表れるようになります。

長い冬を終え、これから八色の森

はカエルたちの恋の季節が始まります。
(令和二年三月一日号)



ヤマアカガエルの卵塊
粘り気が強い



雪の上のヤマアカ
ガエルの卵塊

八色の森では二ホンアカガエルは見られていません。平らなところなので、ヤマアカガエルの範囲です。八色の森公園は田んぼの上で田んぼに成されてきた公園なので、モリアオガエルは見られるのですが、モリアオガエルやサンショウウオ類が来ないのが残念です。また、ウシガエルはとって幸いですが。

